

Nara Women's University

Gender and Culture in Asia

アジア・ジェンダー文化学研究センター

2022年度の活動他

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 奈良女子大学アジア・ジェンダー文化学研究センター 公開日: 2023-05-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 「アジア・ジェンダー文化学研究」編集委員会 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10935/5936

Gender and Culture in Asia アジア・ジェンダー文化研究センター 2022年度の活動



主催

●研究助成公募「アジア・ジェンダー文化研究センター 2022年度 研究課題・研究集会」

募集期間：2022年3月15日(火)～3月31日(木)

採択決定日：2022年4月28日(木)

採択者・テーマ：

崔 誠姫氏

奈良女子高等師範学校の朝鮮人留学生に関する研究：柳原吉兵衛宛書簡の分析を中心に

白井 千晶氏

語りを通した人工妊娠中絶経験の共有：英語サイトの翻訳と日本語インタラクティブデータベースの構築

李 玲美氏(継続)

植民地解放直後の朝鮮女性運動と日本軍性奴隷制—日本軍「慰安婦」問題に対する朝鮮女性運動史研究からの一視点—

岡田 玖美子氏(継続)

夫婦の親密性をめぐるジェンダー構造と第三者による関係調整支援—カップル・カウンセリングの実践から

●ジェンダー・レクチャーシリーズ 第1回：「ケア」とジェンダー

講演者：

曾 環恵氏(アジア・ジェンダー文化研究センター)

高岡 尚子氏(奈良女子大学大学院人文科学系)

日程：2022年11月11日(金) 16:30～17:55

実施方法：オンライン配信

●国際シンポジウム「アジアの社会におけるヘルスケアの現在—子どもから高齢期まで」

講演者：

官 晨怡氏(臺灣大学公衆衛生学院)

井口 高志氏(東京大学大学院人文社会系研究科)

松岡 悦子氏(奈良女子大学名誉教授)

日程：2022年12月10日(土) 14:00～16:40

実施方法：オンライン配信

共催：奈良女子大学文学部言語文化学科

「ジェンダー言語文化プロジェクト」

●2022年度 第17回 女性史学賞授賞式

受賞者・受賞作：

三浦 麻美氏(中央大学兼任講師)

「『聖女』の誕生テューリンゲンの聖エリーザベトの列聖と崇敬」 八坂書房

日時：2023年1月7日(土) 13:00～15:50

実施方法：対面及びオンライン配信

共催：奈良女子大学研究企画室

●ジェンダー・レクチャーシリーズ 第2回：伝統／伝説とジェンダー

講演者：

内田 忠賢氏(奈良女子大学大学院人文科学系)

大平 幸代氏(奈良女子大学大学院人文科学系)

日程：2023年1月31日(火) 16:30～17:55

実施方法：オンライン配信

●講演会

東ティモール女性の紛争経験と記憶—「過去」に向き合う映画「メモリア」の製作過程を辿る—

講演者：

亀山 恵理子氏(奈良県立大学地域創造学部)

日程：2023年2月13日(月) 14:00～16:00

実施方法：奈良女子大学N201 講義室

共催：奈良女子大学文学部言語文化学科

「ジェンダー言語文化プロジェクト」

●大学院生のためのジェンダー研究カンファレンス 第2回 日常を生きるわたしたちのジェンダー研究

実行委員：

堀本 孝子氏(奈良女子大学大学院 博士後期課程3年)

河野 夏生氏(奈良女子大学大学院 博士後期課程1年)

宝田 真実氏(奈良女子大学大学院 博士前期課程1年)

山田 ひいな氏(奈良女子大学大学院 博士前期課程1年)

松尾 有起氏(奈良女子大学大学院 博士前期課程1年)

植村 宥子氏(奈良女子大学大学院 博士前期課程1年)

日程：2023年3月4日(土) 10:00～16:00

実施方法：オンライン開催

● 2022年度 奈良女子大学アジア・ジェンダー文化研究センター／神戸女学院大学女性学インスティテュート ジェンダー交流研究会

講演者：

瀬戸 智子氏(神戸女学院大学文学部英文学科)

市川 千恵子氏(奈良女子大学研究院人文科学系)

日程：2023年3月8日(水) 14:00－16:00

実施方法：オンライン配信

共催：神戸女学院大学女性学インスティテュート

共 催

● オンライン講演会

女性の身体の外見をめぐるフェミニズムの議論と文化表象

講演者：

英 美由紀氏(藤女子大学)

日時：2022年12月20日(火) 13:00－14:30

実施方法：オンライン配信

主催：奈良女子大学文学部言語文化学科

「ジェンダー言語文化プロジェクト」

● 国際シンポジウム アジアジェンダー研究・ウェビナーシリーズ

第3回 周縁化された女性たち—東アジアの世界から

講演者：

鄭 智泳氏(梨花女子大学アジア女性学センター)

鈴木 則子氏(奈良女子大学)

野村 鮎子氏(奈良女子大学)

井野瀬 久美恵氏(甲南大学)

日時：2022年8月29日(月) 14:00－17:00

実施方法：オンライン配信

主催：比較ジェンダー史研究会(科研費基盤研究

(B)『『アジア・ジェンダー史』の構築と『歴史総合』教材の開発』)

● 国際シンポジウム アジアジェンダー研究・ウェビナーシリーズ

第4回 消えた女王—東アジア社会の父系化をめぐって

講演者：

義江 明子氏(帝京大学名誉教授)

文 玉杓氏(中国山東大学)

森本 一彦氏(高野山大学)

河上 麻由子氏(大阪大学)

日時：2023年3月11日(土) 14:00－17:00

実施方法：オンライン配信

主催：比較ジェンダー史研究会(科研費基盤研究

(B)『『アジア・ジェンダー史』の構築と『歴史総合』教材の開発』)

後 援

● 講演会

カルナヴァレ美術館の展示企画：パリの女市民たち！女性解放のための動き(1789－2000年)

講演者：

Christine Bard氏(アンジェ大学)

日程：2023年2月27日(月) 15:00－16:50

実施方法：対面及びオンライン配信

主催：奈良女子大学文学部 欧米言語文化学会

共催：日仏女性研究学会・(公財)日仏会館・フランス国立日本研究所

2022年度 第17回女性史学賞授賞式

奈良女子大学は、歴史家の脇田晴子氏が創設した「女性史学賞」を、2017年度以降、大学として引き継ぎ、アジア・ジェンダー文化研究センターが受賞作を表彰している。「女性史学賞」は、女性史・ジェンダー研究の進展に寄与する優れた単著に与えられる賞で、2022年度（第17回）は、三浦麻美氏の著書『「聖女」の誕生—テューリンゲンの聖エリーザベトの列聖と崇敬』（八坂書房）を受賞作と決定した。

今年度の授賞式は3年ぶりの対面開催となったが、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、会場には受賞者や選考委員をはじめとする関係者のみが集まり、その様子をオンラインで同時配信した。

冒頭の今岡春樹学長による挨拶の後、受賞者の三浦氏に対して賞状と副賞を贈呈した。その後、選考委員を代表して武田佐知子氏（大阪大学名誉教授）が、受賞作に関する講評を行った。中世ドイツにおいて女性が「列聖」されていく意味を問うた本書に高い評価が与えられるとともに、歴史研究の視点からのコメントがなされた。

続いて、三浦氏による受賞作に関する講演が行われた。講演は、本書で取り扱われたテーマのうち、おもに「清貧」理念や運動に焦点をあてて行われた。専門外の多くの参加者にとっては馴染みの少ない「聖人崇敬」や聖人を讃える活動がどのように行われるかについての基礎的な情報の後、本書が主題とするテューリンゲンのエリーザベトにおける「清貧」の理念とその実践について説明がなされた。また、13世紀初頭のドイツにおいて、社会変化によって女性聖人が増加するといったジェンダー的側面については、今後さらに発展がみられる分野であることが理解さ

れた。

講演の後、三浦氏の中央大学大学院時代の指導教員であった杉崎泰一郎氏（中央大学教授）より、本書と研究内容に関するコメントがなされた。杉橋氏はおもに本書に見出される研究の「伸びしろ」の部分について指摘され、「列聖」「崇敬」「女性聖人」をめぐる、さらに広範囲な論点について述べられた。

最後に、オンライン授賞式参加者を交えての質疑応答が行われた。約30分間に、複数の研究者からの受賞者へのコメントや質問が出され、三浦氏がひとつひとつ丁寧に回答された。今年度は対面・オンライン併用の開催となったため、全国各地から多くの参加者（約40名）を得て、熱気あふれる交流の機会となった。

（高岡尚子）



2021年度 大学院生のためのジェンダー研究カンファレンス

第1回「私たちの研究室をもう一度」

2022年3月4日、完全オンラインで実施した「大学院生のためのジェンダー研究カンファレンス」は、学会・研究会だけでなく大学院の授業などもオンライン化され、大学院生どうしの大学を越えたつながりが薄れた状況で、新たな研究ネットワークをつくることを目指して提案したものである。本研究センターがサポートしつつも、大学院生が主体となり企画・運営を行ってきた。運営委員は、本学博士後期課程の陳效娥、博士前期課程の河野夏生、野田ゆうきの3名であった。なお、この日の参加者は発表者も含め、のべ90名であった。

「私たちの研究室をもう一度」という第1回のタイトルは、本学のみならず全国の大学院生が失った研究の場・ネットワークの取り返しを意味している。ポスターに書かれた企画者たちのメッセージは次のものであった。

ZOOM切れれば一人。

とまで言うのは大げさかもしれませんが、オンラインで行われる授業やゼミは、会議室が終了した途端に、それまで共有していた時間ごと閉ざされるような感覚になることがあります。ゼミや授業が終わった後も友人と話し込んだり、学会終了後に勇気を出して気になる人に話しかけに行ったり、「対面」の時代にあった余韻のようなものが失われているように感じるからです。

今回の企画もやはりオンライン開催ではありますが、ああでもない、こうでもないと話し合えるような、そんな「余韻」を取り戻せるような機会にしたいと考えています。

この趣旨からも、コロナ禍の院生たちが失ったと感じているものを、自ら取り戻そうとする試みであったと言えるだろう。

本カンファレンスは、午前中に個人研究発表、午後から文筆家で恋バナ収集ユニット「桃山商事」代表の清田隆之氏の講演、夕方から大学院生限定の懇親会の三部で構成された。

個人研究発表のプログラムは以下の通りであった。

グループA

齋藤あおい(一橋大学大学院 社会学研究科 博士後期課程2年)

「坐月子(ツオユエツ)」の商業サービス化とその意味—1990年代-2000年代の上海を事例に—

駒村日向子(お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 ジェンダー社会科学専攻 博士前期課程2年)

「家庭空間における賃労働とジェンダー—COVID-19 緊急事態宣言下での女性たちのテレワーク経験から—

楊雅韻(京都大学大学院 メディア文化学 博士後期課程1年)

「男女の境界線と化粧—洋風化粧の大衆化過程に注目して—

グループB

片桐真佐子(奈良女子大学大学院 人間文化研究科 博士後期課程5年)

「1980年代日本における主婦のキルト制作活動」

太田香梅(奈良女子大学大学院 人間文化総合科学研究科 博士前期課程1年)

「雑誌『ポップティーン』におけるコンドームの表象」

小口藍子(お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 ジェンダー社会科学専攻博士前期課程2年)

「現代日本の「男性の美容」を起点とする男性性理論の再検討：構造的男性性からパフォーマンス的な男性性へ」

グループC

宓婷梅(お茶の水女子大学 ジェンダー学際研究専攻 博士後期課程1年)

「社会参加仏教におけるセクシュアリティに関する一考察—同性婚をめぐる住民投票に関する報道を対象に—」

岡田悠也(東京大学大学院 法学政治学研究科 法曹養成専攻1年)

「性別変更の自由と子の福祉について」

磯部香菜子(東京女子大学大学院 博士前期課程2年)

「西ドイツにおける「68年」と女性 —アルタナティブな自己の模索—」

午後の清田隆之氏の講演は「ジェンダー研究を学んだ先に広がる世界—ジェンダー問題への「気付き」がもたらす可能性—」という

タイトルで、シスジェンダーの男性という立場から、ジェンダー的課題に気づいた男性に変化の必要性があることを、日常の親しみやすい事例からお話しいただき、参加者からも「わかりやすかった」「学者と一般の方々をつなぐ架け橋」「ジェンダーに関する理解が深まった」等のコメントがあり、好評であった。

夕方からの懇親会も院生どうしの交流の場となり、「研究発表やゲストトークについての議論を深められた」「院生どうしの情報共有」ができたことなど、大変好評であった。

初めての開催だったため手順や実施方法など課題は残ったものの、当初の企画院生たちの目的は十分に達成されたと思われる。大学も研究センターも、学生・院生たちの学びの場をつくるのが困難な時代であるが、今後も社会状況を見据えながら院生たちのジェンダー研究のネットワークづくり、その広がりをサポートしていくことが必要なのではないだろうか。

(文責：山崎明子)

奈良女子大学文学部言語文化学科「ジェンダー言語文化プロジェクト」主催
アジア・ジェンダー文化研究センター共催

講演会：「女性の身体の外見をめぐるフェミニズムの議論と文化表象」

英美由紀氏（藤女子大学教授）

今年度も文学部言語文化学科「ジェンダー言語文化プロジェクト」との共催行事として、講演会を開催した。今回は『終わらないフェミニズム－「働く」女たちの言葉と欲望』（共著、研究社、2016年）などのご著書のある、英美由紀氏（藤女子大学教授）にオンラインでご参加いただき、「女性の身体の外見をめぐるフェミニズムの議論と文化表象」というタイトルでご講演をいただいた。

英氏は近年とくに注目を集めるようになってきている「ルッキズム」の概念から出発し、それが文学作品や映画といった表象の分野においてどのように取り扱われ、またそれによってどのような議論がなされてきたかについて論じられた。

「ルッキズム」とは外見に基づく差別を意味するが、その差別が及ぶと想定される範囲は非常に広い。なかでも、女性の身体（外見）に関する規範やそれを実現するための実践については、フェミニズムの議論のなかでも重要な位置を占めている。本講演の前半部分において、英氏はこうした議論の蓄積について、フェミニズム第一波からポストフェミニズムまで、重要な基礎文献にふれつつ内容と変遷を整理された。

続いて後半部分では「英語圏の表象テキストにおける女性美、美容行為」について、議論が繰り広げられた。英氏は19世紀イギリス文学を代表するC. ブロンテ『ジェイン・エア』における、ヒロイン（ジェイン）の表象から出発し、とくに1980、90年代以降の英語圏の文学・視覚表象テキストを、分析の対象として示された。そこで注目されたのは、身

体の外見の「医療対象化」が進むなかで、規範としての美に対して女性が採り得る行為の可能性についてであった。F. ウェルドンの『魔女と呼ばれて (*The Life and Loves of a She-Devil*)』（1983）は、夫を美貌の女性に奪われた妻が、自身の外見を相手の女性そっくりに改造し、奪われた座を取り戻すというストーリーを持つが、そこには「美」の規範による抑圧と同時に自己改造の可能性という意味では「エンパワメント」の側面も見出される。また、『ブリジット・ジョーンズの日記』（1996）に代表される「チック・リット」のジャンルに描かれる女性主人公たちの美容行為についての分析や、読者との相互関係についても論じられた。

最後に「ルッキズム」と関連して論じられることの多い、いわゆる「ミス・コンテスト」を題材とする2000年代以降の映画（『彼女たちの革命前夜（*« Misbehaviour »*）』（2020）など）についても言及された。女性の身体の外見とその表象をめぐる問題は、現代社会においても繰り返し議論の俎上に乗せられるものであるため、今回の講演には80名近い参加者があり、質疑応答も活発に行われた。日々の生活の中で、すでに内在化してしまっている「外見の美への要請」をどのように受け取るか、また、そうした規範を身体上に実践することで他者とどう関わることになるのか、など、さまざまな示唆に富んだ講演会であった。

（高岡尚子）

オンライン「ジェンダー・レクチャーシリーズ」

センターでは、今年度からの新しい試みとして「ジェンダー・レクチャーシリーズ」を開始した。これは各分野の学問と「ジェンダー」との関り方を、おもに学部生を対象に紹介するもので、毎回、異なる分野の2名の講師が、ひとつのテーマをめぐって20分程度のレクチャーを行う。その後、それぞれの内容についてオンライン上で質問を受け付け、テーマについての論点を共有したり、掘り下げたりすることを目指している。

第一回目はテーマを「ケアとジェンダー」とし、2022年11月11日（金：午後4時半から6時）に開催した。まず、曾 環蕙助教（アジア・ジェンダー文化研究センター）が「母乳か粉ミルクか：バングラデシュ村落の事例から」というタイトルでひとつ目のレクチャーを行った。続いて、高岡尚子教授（同センター長）が「『ケア』を描く文学の向こう側：女性の乳房・授乳の描き方をとおして」というタイトルでレクチャーを行った。

第二回目はテーマを「伝統／伝説とジェンダー」とし、2023年1月31日（火：午後4時半から6時）に開催した。内田忠賢教授（研究院人文科学系）が「伝統文化と女性—鈴木正崇『女人禁制の人類学—相撲・穢れ・ジェンダー』に学ぶ—」というタイトルでレクチャーを行った後、大平幸代教授（研究院人文科学系）が、中国の説話における「神女」について語られた（「神女は女か？：中国の神女説話からみる「女」へのまなざし」）。

いずれの回も、異なった分野の研究者が同じ「ジェンダー」という観点からの論じ方を提示することで、一見すると全く共通点がないように思われる事象の奥に、性をめぐる問題の諸相を感じ取るきっかけを与えるものとなった。講師によるレクチャーの部分は録画して、センターHPで公開しているのので、ぜひご視聴いただきたい。

（高岡尚子）



2023 奈良女子大学女性教員数

理学部 松岡由貴

アジア・ジェンダー文化研究センターでは1993年から奈良女子大学の女性教員数を調査・報告しているが、今年度から、安田恵子教授に代わり松岡がこの欄を担当する。

文部科学省による学校基本調査によると、2022年度の全国大学教員数は190,646人(前年度から198人増)、その内女性教員数は50,980人(同743人増) 26.7%(同0.4%増)で、相変わらず緩やかな増加が続いている。

2023年1月31日現在の奈良女子大学の教員数は187名、そのうち女性教員数は72人、38.5%で前年から0.3%の増となった。(表1、図1) 文学部・理学部・生活環境学部のいずれも数値は増加しているが、文学部以外はここ数年頭打ちの状態である。学科・コース単位で女性比率が上がったところは「女性増」が2、「男性減」が2、「女性増・男性減」が1であり、女性教員増と男性教員減の影響が半々ということになる。但し、2021年から2022年にかけては生活環境学部の学科再編や工学部の新設により学内での教員の移動も多くあったため、学科・コース別の評価だけではなく全体の変化と併せて考える必要がある。

この1年で全体の教員数は女性4人・男性5人の増であった。第3期中期目標・中期計画では目標値の女性教員比率35%を達成し

たが、第4期の目標値「女性教員比率41%」を達成するには、同じく第4期で掲げている「女性教員採用比率の維持(第4期中期目標期間終了時点で50%)」より採用比率が低いとみられ、今後も女性教員採用への更なる努力が必要である。特に、新設された工学部の女性教員比率が18.8%で目標値の半分以下であり、積極的に女性教員採用を推し進めて欲しい。

表1 奈良女子大学における女性教員数・男性教員数
2023.1.31 現在

文学部		
学 科	女性教員数	男性教員数
人文社会科学	7 (33.3%)	14 (66.7%)
言語文化学科	14 (63.6%)	8 (36.4%)
人間科学科	4 (36.4%)	7 (63.6%)
	25 (46.3%)	29 (53.7%)

理学部		
学 科	女性教員数	男性教員数
数 学 科	4 (33.3%)	8 (66.7%)
物 理 学 科	4 (25.0%)	12 (75.0%)
化 学 科	2 (14.3%)	12 (85.7%)
生 物 学 科	4 (26.7%)	11 (73.3%)
環 境 学 科	3 (42.9%)	4 (57.1%)
	17 (26.6%)	47 (73.4%)

生活環境学部		
学 科	女性教員数	男性教員数
食物栄養学科	7 (58.3%)	5 (41.7%)
心身健康学科	10 (55.6%)	8 (44.4%)
住 環 境 学 科	3 (30.0%)	7 (70.0%)
文化情報学科	7 (53.8%)	6 (46.2%)
	27 (50.9%)	26 (49.1%)

工学部		
学 科	女性教員数	男性教員数
工 学 科	3 (18.8%)	13 (81.3%)
	3 (18.8%)	13 (81.3%)

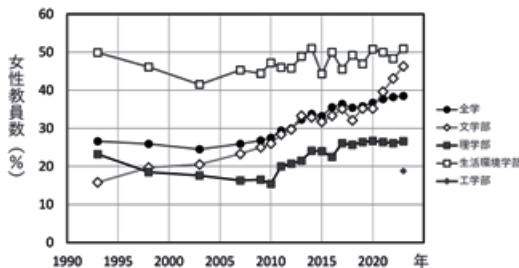


図1 奈良女子大学女性教員比率の変動

全学教員数 187
女性教員数 72 (38.5%)
男性教員数 115 (61.5%)

*教員は学部にも所属する教授、准教授、講師、助教とした。